

東海からみた邪馬台国時代の新潟 － 登呂の洪水以後の東日本 －

篠原和大（静岡大学人文社会科学部教授）

はじめに

皆さん、こんにちは。静岡から参りました篠原と申します。今日はよろしくお願ひいたします。ただいまご紹介いただきましたように、私は静岡大学で考古学を担当しております、普段は登呂遺跡の復元された水田で田起こしから始めてコメの栽培を実際にやってみて、当時の農業がどうだったかとか、そんな研究をしています。

邪馬台国の時代

（スライド1）今回は「倭国大乱～律令国家成立までの越後平野」に関連してお題を頂いて、「東海からみた邪馬台国時代の新潟」、副題が「登呂の洪水以後の東日本」ということでお話をさせていただこうと思っております。ただ、私はずっと静岡のことを研究しているものですから、タイトルには「邪馬台国時代の新潟」とありますが、新潟のことはあまり明るくありません。スライドに古津八幡山遺跡と登呂遺跡の写真があって、時期が厳密に言うとは少しずれますが、ほぼ同じ時代ですね。ですので、新潟の方の話は古津八幡山遺跡などについて少し触れて、静岡とその周辺の東海地方の同じところのお話をしていきたいと思ひます。それで、最後に少しふたつを比較してみようというのが今日のねらいです。

それから、副題に「登呂の洪水以後の東日本」とあります。古津八幡山遺跡など新潟のほうでは高地性の環濠集落が有名で、邪馬台国時代の倭国大乱の証拠ではないかということで議論されていると思ひます。同じところの登呂遺跡で、写真のような農耕集落が築かれますが、最期は洪水で埋もれて、集落が終わってしまうんですね。洪水で埋もれるというのは、かつては登呂遺跡の独自のストーリーの最後の1コマだったんですが、最近静岡周辺でも登呂遺跡が埋もれるのと同じ時期に、いろんな遺跡が洪水で埋もれることが分かってきました。それから、自然科学的な方法で当時の気候を復元するような研究が出てきて、どうも登呂遺跡の洪水のころに全国的にも極端に降水量が多い年があって、そのあと気候変動が起こってくるというようなデータが出てきてい

ます。そう考えると、登呂遺跡の洪水というのは登呂だけの出来事じゃなくて、日本列島全体でそういう気候変動が始まったきっかけだったんじゃないかということが言われるようになってきました。だから古津八幡山遺跡に高地性の環濠集落がつくられて変動・動乱の時期が始まる辺りと関連して、登呂が洪水で終わってそのあとやっぱり気候変動の時代に入る。そんなことが関係してくるんじゃないか。そういったことにも注意しながら、最後にまた、新潟と太平洋側の静岡の話と比較してみたいと思ひます。

新潟と静岡

（スライド2）つい最近静岡から山梨まで中部横断道という高速道路がつながりました。太平洋岸と日本海側をつなぐ道路の一部で、昔からこういうキャッチフレーズがあったんですね。「君は太平洋を見たか 僕は日本海を見たい」。静岡から山梨に行くのには静岡から興津川を経て富士川を上がっていく。高速道路も同じルートを通っています。甲府盆地に出て中央道を北に上がって行って、野辺山高原を通って、佐久小諸インターに到達するんですね。そこまでの道が完成したという話です。つぎはこの佐久辺りから新潟に行こうとすると、関越道に行ったほうが速いんですかね。でも、今度は新潟から信濃川、千曲川とたどっていくと、佐久とか小諸の辺りまで行くわけですね。静岡の同僚が新潟の小千谷という所で何年か前まで発掘をしていて、小千谷の地元の人に、信州のほうを台風が通過すると、信濃川にりんごがいっぱい流れてくるんだってという冗談話を聞かされたということを知りました。ということは小諸の辺りで千曲川にりんごを流すと、結局新潟までそのりんごが流れ着くだろうと。一直線にこうつながっていて、川を伝っていけば新潟までたどり着くことができた。

邪馬台国時代、実年代だと2世紀から3世紀ぐらい。弥生時代から古墳時代にちょうど移り変わる頃です。弥生時代頃までは静岡と新潟の間の直接の交流はあまりなくて、静岡辺りは信州辺りと隣り合っ

ていますので、その間の交流。また、信州と新潟のほうとの間で交流があって、そういうふうにしてつながる。そのあとの古墳時代、静岡では高尾山古墳という古墳時代の初頭ぐらゐまでさかのぼる前方後方墳が見つかっています。高尾山古墳からはいろいろな地域の土器が出ていて、その中にどうも新潟の土器も混ざっている。新潟の土器そのものじゃないかもしれないんですけども、明らかに新潟の影響がある土器が。ですから、そのくらいの時期になったら信州とのリレー式の交流ではなくて、どうも直接新潟から人が来ている可能性があるということなんです。すると当時高尾山古墳の近辺に、新潟から来た人たちがいた。そのころ「太平洋」とか「日本海」とは言っていなかったと思いますが、静岡にきた新潟の人に「太平洋を見たかい」、「僕は日本海を見たい」と、そういう交流があったかもしれない。というようなところからお話を始めたいと思います。

邪馬台国時代の新潟と静岡

(スライド3)最初に少し整理してみようと思います。「邪馬台国時代」というのは、弥生時代後期から古墳時代初頭頃、2世紀後半から3世紀の中ごろでしょうか。その時期の「新潟」と「東海」、「東海」といってもその東のほうの静岡の話が中心になりますけれども、その中で何が起こっていたのか。

まず、新潟の話は最初にちょっとだけ触れるのと、今回の展示と図録にお任せして、せっかくですから静岡の話を中心にしたと思います。古津八幡山遺跡と同じところに静岡とその近辺で何が起こっていたのか。①の登呂遺跡の盛衰というのは、弥生後期の前半のころの出来事で、そのあと静岡でもいろんな、「動乱」と呼ぶような出来事が起こってきます。②の愛鷹山の山麓には、後期の後半に非常に標高が高い所に大きなムラが出現します。古津八幡山遺跡と似たような状況かもしれません。また、③「菊川式土器の関東地方への移動と環濠集落」とありますが、静岡のすぐ隣の地域辺り、菊川とか掛川といった地域の人たちが急に関東地方に出掛けていくような状況、土器からその動きがわかってくるんですが、移動した先で盛んに環濠集落をつくっているということがあります。ですから、いろんな動きの中で見ると、静岡でも高い位置に移動する村があったり、関東のほうに移動して環濠集落をつくったりと。古津八幡山遺跡と同じようなことが静岡でも起きているっていうことですね。古津八幡山遺跡も、古墳時代の始まりごろになってくると村が終わってしまう

と言われてはいますが、静岡近辺でもそういう環濠集落の時代というのが終わって、先ほどお話しした高尾山古墳が出現する。北陸系の土器、もしかしたら新潟の土器が高尾山古墳に行っているということがわかります。この間大体100年ぐらゐだと思うんですね。「邪馬台国時代」のことは『魏志』倭人伝に邪馬台国のことが書かれた時代ということなんです。それをたどってみて、また最後に新潟との比較をしてみたいと思います。それが3. ですね。そういうふうによく見ていくと、古津八幡山遺跡などの新潟の弥生後期の遺跡の状況と静岡、関東の辺りの遺跡の状況が似ているようなことがあるんですね。さらにそのあとの時期に広い範囲で人と土器が動く。高尾山古墳に新潟の人が来た時期ですが、それもどういうことなのか。そんなことで話をまとめていきたいと思っています。

1. 邪馬台国時代の新潟と東海（静岡）

邪馬台国時代の時間軸

(スライド4)新潟と静岡、先ほどの地図で測って見たら、330キロぐらゐ直線距離であります。それほど離れていて、ほぼ同じ時期の話だと言いましたが、はっきりしないことも多いし、僕の勉強不足もありますので、こんな表でまとめる段階ではないのですが、おおよそなところで、時間軸と新潟と静岡あるいはその周辺の様子をまとめてみました。

ですから、この表で新潟と静岡を比べて横に並んでいるから同じ時期だというのはなかなか言いにくいのですが、その辺は容赦してもらって表を見ていただきたいと思います。「邪馬台国時代」は考古学の時代の区分でいくと弥生時代と古墳時代の間ぐらゐ、弥生時代の後期頃ですね。『魏志』倭人伝の話で「倭国乱」というのがあって、それが「桓霊の間」と書かれています。A.D.180年前後、2世紀の後半ぐらゐ。大体西暦の150年ぐらゐから2世紀いっぱいぐらゐがそういう「倭国乱」の時代で、卑弥呼は最後大きな墓をつくって死ぬっていう記載がありますけど、これが247年という年代が言われていますので、3世紀の真ん中ぐらゐ。だから邪馬台国の時代っていうのは大体2世紀の真ん中から3世紀の卑弥呼が亡くなるぐらゐまでの間をいうと思いますが、この表でいくと後期の真ん中ぐらゐから3世紀・古墳時代の「終末/早期」と書いてあるところがありますが、そのぐらゐの時期までということになるかと思っています。

新潟ではそのころ、この会場の裏にある古津八幡山遺跡が、後期の前半の終わりぐらいから始まると言われています。後期の間、丘陵の上にムラをつくる。周りを環濠で囲む。「倭国乱」の時代、そういう戦いがあった時代、考古学の証拠としては、村の周りを溝で囲む「環濠集落」であるとか、高い所に村をつくる「高地性集落」といったことが、そういった戦乱の証拠ではないかといわれています。まさに新潟の古津八幡山遺跡は両方兼ね備えた、戦乱に備えた集落というのにふさわしいとして古くから注目されてきたのだと思います。

今回の展示のほうに詳しいと思いますが、古津八幡山遺跡だけじゃなくて、いくつかそういう有名な遺跡があるわけです。越後の方の裏山遺跡。それから斐太遺跡は学生のころに、大学にその資料があって、東海系のS字甕が出ていたりして気になっていた遺跡ですが、古く調査されて有名な遺跡です。そういった「高地性の環濠集落」が、弥生後期前半の新しい時期ぐらいから各地で始まって、古い新しいは多少あるでしょうけれども、後期の終わりぐらいの時期に環濠が埋まるということも確かめられているということですね。それが終わって「終末/早期」というあたりになると、その「高地性の環濠集落」が終わりを迎えて、他地域の土器の流入といったことがおこる。

それからもう1つ、新潟の「高地性集落」、「環濠集落」でポイントになるのは、特に古津八幡山遺跡ですけれども、新潟の、北陸北東部系の土器と一緒に、天王山式という、福島のほうの土器と一緒に出てくるという話がありますね。その天王山式と新潟（北陸北東部系）の土器と一緒に出てくる、「環濠集落」の中で「異系統」といいますが、ちょっと風合いの違う土器と一緒に出るということは、やはり由来を異にする人たちが一緒に暮らしていたということなのでしょう。戦乱の中では、もしかしたら対立する人々ということになるかもしれないですが、よくよく見ると集落では、何だかんだ言って一緒に暮らしていたということになるのかなと思います。その100年ぐらいの中で、新潟ではそんな歴史がおそらくあった。

一方で静岡では、後期の前半は登呂遺跡がムラを築いた時期。それがどうも後期の真ん中ぐらいに洪水で埋もれる。そのあとに、この近辺で菊川式土器が、おそらくそれを使った人たちが関東のほうへ移動していくような現象がある。あるいは足高尾上遺

跡群という、ムラが高い所に移動している。そんな移動の時期というのがあります。

新潟で古津八幡山遺跡が終わるころ、あるいは少しあとぐらいですかね、話題になった高尾山古墳というのがそこあたりまでさかのぼる。その次の段階あたりになってくると、静岡でも定型的な前方後円墳も出現するようになっていきます。あとでいろんな話をしますので、先に整理して説明させていただきます。

『魏志』倭人伝の頃の新潟

（スライド5）まずは新潟ですが、今回の展示に詳しくまとめてあるかと思いますが、『魏志』倭人伝の邪馬台国の話にある倭国大乱。その頃、新潟では「高地性の環濠集落」がつくられた。古津八幡山遺跡とか裏山遺跡、斐太遺跡。地図が載せてありますけれども、かなりたくさん「高地性環濠集落」があります。それが新潟の特徴ということでしょうね。ここでは、特に北のほうの古津八幡山遺跡あたりの特徴でしょうけれども、北陸北東部系と天王山式とか東北系の土器と一緒に出てくる。八幡山式という両方を折衷した土器もあると伺っておりますけれども、そういったものを出す集落・環濠が後期の終わりころに埋没するということですね。

（スライド6）そのあとの卑弥呼の時代。卑弥呼が247年に没して、お墓がつくられたということですから、大体卑弥呼が活躍したのは200年代の前半、3世紀の前半ということになります。そのころの新潟を今回展示で扱ってあって、遠いところから土器が来るということです。東海の西のほうの土器だと思えますが、北陸南西部の土器と一緒に新潟にやってくる。あるいは東北、天王山式が激減するという話ですけれども、この時期に北海道のほうの土器が来るという話もトピックとして伺っています。やはり列島の各地域の土器が広域に動く時代だったということでしょう。

登呂の洪水はA.D.127年か!?

（スライド7）静岡の話にいく前に、「登呂の洪水はA.D.127年か!？」という話をしておきたいと思います。今回のタイトルにも「登呂の洪水」というのを挙げていて、実は、今回の話をしようと思ったときに、これが一番目玉だなと思っていたんです。ただ、今は少し不安になっています。もう10年ぐらい前からですが、木の年輪の中に含まれる酸素の同位体比を調べると当時の天候がわかるという研究が急速に進められてきています。中塚武さんという方が

中心になって進められていて、10年前ぐらいにスライド（上の表）のデータが示されたんです。表の下に年代軸がありますが、B.C.50年頃から始まってA.D.300年ぐらいまでのデータがあります。グラフは降水量の変動を示しているということなんですけど、下に出っ張っているとかなり雨が多かった。上に出っ張っていると乾燥していた。それが災害となると、下に出っ張っていると洪水で、上は干ばつということになります。この表で目立つのがA.D.127年の降雨が多い年です。A.D.100と150の間に、赤い三角を入れましたけれども、下にどーんと突出している年があるんですね。A.D.127年には極端に木の水分が蒸発しなかったということなんですけども、恐らくずっと雨が降り続いていた。そんな年があったということですね。

それも注目されますけれども、中塚さんは、それを境にあとの時期になると今度は干ばつが続く年があって、また数十年たってから、今度は洪水が続くような年があることに注目しています。ときどき洪水が起こるといことがあれば、臨時に対応すればよいという話ですが、洪水の年がずっと続くとか、10年たつと今度急に干ばつが続くとか。そうなるのが人間の暮らしにとっては一番大変だということ言われていて、そういう時代が、127年あたりをきっかけに、そのあと続いたんだと書かれています。その時期は倭国大乱のような動乱を生じさせる最も危険な気候変動があったと。それがこの2世紀の127年あたりから3世紀に至るぐらいまで。まさに倭国、倭国大乱の時期に重なるんですね。そんな時期だったかもしれないと中塚さんが書かれています。

弥生時代後期の登呂遺跡にこの気候の変化を持ってくると。登呂遺跡は後期の初めぐらいに始まって、洪水で終わるんですけども、その間ほとんど洪水のような兆候はないんですね。突然、洪水で終わる。そう考えると、弥生時代の気候変動の中で、やはり127年に突出した雨の年があるのは、登呂遺跡の洪水と重なるんじゃないかと。登呂遺跡だけでなく静岡周辺の弥生後期のほかの遺跡でも洪水で埋まる遺跡が多いので、やはりこれはポイントになるんじゃないかと考えたわけです。

これは私が勝手に思っていたことでもありますが、やはり10年ぐらい前に、愛知県の赤塚次郎さんという有名な研究者がいらっしゃいますが、赤塚さんはやはり伊勢湾の地域でもこれが大きな変動の始まりのきっかけになって、古墳時代へと舵をきって

いった。廻間様式という古墳時代初頭の土器様式がありますが、それが誕生するきっかけになったのもこの時期だと説明されています。だから登呂遺跡の洪水の話をするれば、今日の話いけるんじゃないかと思って、タイトルをつけたわけです。

ただその研究、10年ぐらい進められていて、去年それをまとめた本が6冊組で出版されました。『気候変動から読みなおす日本史』。その中で「東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動」という論文を愛知の樋上昇さんが書かれています。その研究によると、スライドの下で、さらに前の時期から通してみると、弥生時代の後期の始まるもう少し前ぐらいから急に湿潤な気候に変化していて、それが長期的な気候の変動の中で大きな意味があったんじゃないかというようなことを言われています。表の下に書いてある土器編年の年代と僕が考えていた年代もちょっと合わなくなってきたので、127年というのが本当に登呂の洪水の時期に当たるのかというのは今だにぶ揺らいでいるところです。今後の成果を見守っていこうと思っています。

2. 邪馬台国時代の東海～静岡を中心に～

（スライド8）静岡の話これからしていこうと思います。スライドは、静岡の平野部を西の上空から撮った航空写真ですけども、お約束の富士山が入っています。右手は駿河湾。手前の平野部が静岡の街です。真ん中あたりの海側に有度山という三角形の山があって、上部は日本平と呼ばれています。その向こう側に砂嘴が伸びていて、それが三保松原の半島ですね。三保松原は富士山と一緒に世界遺産になっています。静岡の平野部は、旧静岡市と旧清水市が一体になって形成されて、静岡・清水平野と呼ばれています。

登呂遺跡は、ここに少し黒っぽく見えているところです。東名高速道路が南の端を通っていて、水田の一部が調査されています。このほか、登呂の母ムラといわれている有東遺跡がこの辺です。二つの遺跡はともに平野の真ん中にあります。登呂遺跡では広い水田が見つかっていますけれども、地形のことから考えると登呂遺跡は田んぼを開くには非常にいい環境にあったということがわかってきました。手前の方に安倍川が流れているんですが、実は安倍川がこの平野をつくっている。縄文時代に平野部は海だったわけですけども、縄文時代の終わりにかけてだんだん冷涼化してきて、河川の堆積作用で低い

ところにどんどん土砂が流れ込んで、平野ができる。いわゆる扇状地という地形をつくるんですね。扇状地は洪水のときに土砂が川から熊手状に広がって堆積してできるわけですが、緩い傾斜を持っています。扇状地ができたあとは水は上のほうで伏流して、地下水になってしまうんですけども、それがもう一度、扇状地の端っこ（扇端）に近い所になってくると地表水となって出てくるようなところが多くあります。そうした水は、穏やかで管理がしやすく、水田に引くことが容易ですし、緩い傾斜がありますから、高いほうから水田の区画をつくっていった水を入れて低いほうに流していくと、水田ってつくりやすいんですね。そういうこと考えていくと、どうして登呂遺跡の周りのような地形に水田が広がったのかとかいうこともわかってきます。

そんなことで、弥生時代の登呂遺跡、静岡の弥生時代の水田が発見される遺跡というのは、この平野の真ん中、扇状地の端っこにあるんですね。その辺は新潟の古津八幡山遺跡とはかなり違う環境にあるということがいえます。

（スライド9）遺跡の立地の話をしましたが、そういう場所に有東遺跡とか登呂遺跡とかあるわけです。先ほどの写真で大体静岡の地形がわかったかと思えますけれども、左上が、弥生時代の中期のころの遺跡の分布を示したものです。有東遺跡と書いてある辺りにまとまりがあって、駿府城（14）のあたりとか、川合遺跡（32）のあたりにも遺跡のまとまりがある。それが右下の登呂の段階になると、遺跡の数がたくさん増えているのがわかると思います。登呂遺跡の周りにも遺跡が増えているんですけども、登呂遺跡は23番ですね。有東遺跡が21番。登呂遺跡の昭和の調査のときに、周辺の遺跡も調査した結論として、弥生時代後期の登呂遺跡は、弥生時代の中期の大きなムラだった有東遺跡があってそこから分かれた。有東遺跡が母ムラで登呂遺跡は子ムラだということが言われました。その成果は正しくて、その後の調査でも有東遺跡が弥生中期の大きな集落遺跡で、弥生後期になって登呂遺跡が出てきたということが追認されてきました。

①登呂遺跡の盛衰と後期中頃の洪水

有東遺跡から登呂遺跡へ

（スライド10）これは登呂遺跡周辺の遺跡の様子を示した地図ですけども、左側が中期で、水色で有東遺跡の集落の範囲が示してあります。有東遺跡は、弥生時代中期後半・Ⅳ期のころには大きな遺跡だっ

たんですが、遺跡のムラの部分というのはその水色の部分しかなくて、周りに紺色で遺跡が示してありますけど、ほとんどお墓なんですね。右側に後期の様子が示してあります。今度は茶色で集落の部分が示してありますけれども、ムラの部分がかなりたくさん増えている。ですから有東が母ムラで、そこから登呂遺跡が分かれたんですけども、分かれたのは登呂遺跡だけじゃなくて、いくつかのムラが分かれた。そんな状況がその後の調査でもわかってきています。

登呂ムラの成立

（スライド11）登呂ムラの成立です。弥生時代の集落という丸く固まってひとところにあるように思われがちですけども、登呂遺跡は調査が進んでいくと、北側に川が流れているのがわかってきて、どうもその自然堤防、川のへりに高まりがあるんですけども、そのへりの高まりの上にとずっとムラがつくられていたようです。ムラの形は地形に制約されて、川に沿って細長い居住域が広がっていたのが登呂遺跡ということになります。

登呂遺跡には後期の段階になって初めて人々が住み始めて、水田も恐らく一気に拓かれたと考えられています。中期には有東遺跡の周りだけで生活していたのが、後期にムラが分散的になって、水田域が各段に広がったということが言えるということですね。

登呂遺跡の調査成果

（スライド12）登呂遺跡は、戦後間もない時期に調査されて、はじめて弥生時代の水田とムラが一体となって発見された遺跡として全国から注目されました。ただ、吉野ケ里遺跡とか、池上曾根遺跡とか、全国にいろんな遺跡が見つかってきて、昭和の終わりごろになると、あまり真新しさがなくなってきたんですね。最初の調査から50年たったころ、1990年代ぐらい、これじゃいかんということになって、もう一回調査して、登呂遺跡の新しい姿を描きだしましょうということになりました。現在は、昭和の頃に有名だった登呂遺跡の姿と大きくリニューアルして、新しい博物館もできています。もし機会があったらぜひ来ていただきたいと思います。

1947年から50年ごろに、昭和の発掘調査が行われました。そのころから最期は洪水によって埋もれたムラという評価があったわけですけども、当時の発掘では、こういう低地の発掘ですので、発掘していくと水がどんどんわいてくる。結果的に遺跡の面

に到達しても一番上のほうの部分しか正確には調査できなかったということがあるようです。

(スライド13) 50年後、平成のころに発掘をしたんですけれども、発掘の方法もいろいろ新しくなって、強制的にポンプで排水ながら調査しているので、遺跡がこうあったというだけじゃなくて、何が同時にあったとか、地層の前後関係とか、そういうのもわかるようになったんですね。そうすると、ムラが始まったのも弥生時代後期だったというのがわかってきたし、ある一定の変遷をとげて、続いて、弥生時代後期の中ごろに洪水で埋没した。一時期ちょっと復興したけれども、すぐ、最終的には人がいなくなりました。

もうひとつわかったのは、水田のことで、洪水の前の水田は普通の土盛りの畔でつくった水田なんですけれども、洪水のあとになると、水路とか畔を矢板で補強する。それは昭和の調査のときからわかっていたんですけれども、板で補強するのが始まったのは洪水のあとだったということが新たにわかった。ムラをつくったときから水田はあったけれども、洪水でこりたんですかね。洪水のあとにかなり水田を補強しているということがわかりました。一度史跡として整備されていた所を発掘するというのは、いろいろと困難があると思いますが、古津八幡山遺跡の調査もそうだろうと思います。

(スライド14)これは登呂遺跡の平成の発掘調査の報告書にあげてある図なんですけど、左のほうから矢印の順に、ムラの中心部分がどういうふうに変遷したかということを示してあります。最初ムラが作られてから、水路の位置なども変わってきているのがわかりました。平成の調査の1つの大きな成果は、後半の時期になると、ムラの真ん中に昭和の調査でわからなかった大きな建物が1棟あったということがわかってきました。それはほかの倉庫とかとは違う独立棟持柱を持った大型の建物で、お祭りのための建物、つまり「祭殿」と考えられています。そうした変遷があって、最後の段階で洪水に埋もれる。そのあと少し復興した様子もわかってきたんですが、ムラの部分は放棄されて、一方、水田は補強されて継続していく。調査された方が熱心に整理をされて、そういった7段階の変遷があったことがわかってきたわけです。

登呂遺跡全体では、大きな位置関係としては、川に沿って微高地の上にムラがあって、その南側にやはりかなり広い水田がある。静岡平野では、登呂遺

跡の昭和の調査以降いろいろな発掘が続けられて、かなりの水田があるというのがわかってきましたが、弥生時代中期の間は、水田がなかなか見つからないんですね。水田をつくる方法が後期に大きく変わるといえることがあるんですけども、後期の登呂遺跡の段階になると急に広い水田が作られるようになる。そんなこともわかってきました。

(スライド16)これはドローンで撮影した写真ですが、登呂遺跡は今こんな状況になっています。昭和のころの整備では北のほうにムラが再現され、ちょっと離れた南側に水田が復元されていて、間が森になっていたんですね。それは弥生時代当時の景観とはかなり違っていました。平成の調査で、ムラと水田の間を水路で区画をして、その南側に水田が広がるという状況がわかってきました。最初にお話しした私たちの田んぼはムラの真ん前のこの辺で、ちゃんと草取りをしなくて草ボーボーになっている所がありますね。管理をしなかったらどうなるか実験してみようと。復元されたムラと水田は、集落のおわりの頃の姿をかなり正確に再現しているということになります。

鉄の普及がもたらした変化

(スライド17)ほかの遺跡の調査などからもわかってきたことですが、登呂遺跡が急速にこの水田域を広げたということの背景には、これも全国的に言われるようになったことなんですけれども、東日本で特に弥生時代中期と後期の間で、鉄の普及率というのが大きく変わったことが考えられています。弥生時代の中期までは石器、特に石の斧がたくさんあったのが、後期に急になくなる。登呂でも鉄そのものはなかなか出てこないのですが、石器が極端に減少します。鉄が出ないのは埋没環境に問題があると言われていますが、同じ静岡の川合遺跡など、いくつかの遺跡では鉄の道具もかなり見つかっています。そうするとやはり鉄が普及して、それによって木材加工とかいろんな資源活用というのが大きく変わるわけですし、それで石器を集中的に生産して道具をつくるということからもある程度解放されるわけです。有東遺跡のように中期まで大きなムラをつくったというのは、石器や木器を集中生産しなきゃいけないかと思うようなことがどうもあるんじゃないかと思いますが、後期になると、鉄器の普及で生産も分散的にできるようになって、広い範囲で開発が可能になった。そんなことが考えられるんじゃないか。

鉄が結局登呂のムラの発展に大きく影響を与えたと考えられるのですが、この背景には、土器の系統関係を考えてもそうだと思うのですが、静岡と中部高地を経た北陸・日本海側との関係があるのだと思います。実は登呂式土器は、中部高地と非常に関係がある。赤く塗る櫛描文の土器なんですね。そのことから、中部高地を経由して鉄がもたらされたということは考えられるのですけれども、恐らくその先には北陸、日本海側があって、そこから入ってきた鉄が登呂に伝えられたということになるんじゃないかと思います。

「祭殿」の祭りと農業共同体

(スライド18) それから、先ほど「祭殿」といった建物のそばに、水路から水を引いて、水溜めをつくったような場所があって、そこからはいろいろな祭祀的な道具が出てきました。お墓ではなく、ムラの中で銅製の腕輪が見つかるということは、なかなかないんですけれども、登呂ではそれ結構たくさん見つかっていて、ほかにも鹿の肩甲骨で占いをする卜骨。木製の剣や刀、これらは実用品ではないんですけれども、たくさん出てくるというのは、それを使っておまつりをやったのだらう。その「祭殿」の周りでは、人がたくさん集まってやるようなおまつりがあった、そんなことが考えられています。

(スライド19) 登呂は有東の集落から分かれたということですが、有東から分かれたムラはやはり登呂だけじゃなくていくつかあるのは先ほど示したとおりです。それと同時に、水田域が飛躍的に広がったということですね。それぞれのムラがどのぐらい、どういう範囲で水田を持っていたか。この図にはその可能性がある範囲を示したのですが、もしかしたらムラとムラの間で連続していたかもしれない。それぞれムラはわかれていてもお互い協力しながら水田を経営していたということが言えるかと思えます。そういうムラとムラのつながりを、結束をかためていくのが、登呂の「祭殿」でのおまつりだったというようなことも言えるんじゃないかと。この農耕社会の結合の様子が、登呂が成立してから洪水までの間というのは、特に言えるんじゃないかと思えます。

洪水のあとも水田域はこのまま続いていくので、恐らくこういって集落間との関係というのが、続いているんだと思います。ただ登呂ムラはなくなるわけなんですけれども、北側の鷹ノ道遺跡とかに一部ムラが残っています。また、そのころ日本平丘陵の縁、静

岡大学もこの辺にあるのですが、その周りに新しくムラが急に出てきます。洪水で低地の登呂ムラが埋もれて、そこを離れるわけですけれども、それがちょうど静大の建っている丘陵の裾野に移ったと考えると、非常に整合的なんですね。恐らくそうなんじゃないかなというふうに思っております。

(スライド20) この図はそのころの静岡平野の様子をまとめたものですが、登呂の周辺だけじゃなくて、いくつかの地域でそういった水田の開発が進む。恐らくそれぞれのムラもまた後期の中ごろの洪水を被っているのですけれども、静岡平野の各地で一生懸命水田の畔などを矢板で補強して、また同じ所に水田を拓き直している。そのまま使えた所もあるでしょうけれども。そんな状況があります。

中塚さんの話では、恐らく後期の真ん中ぐらい以降、干ばつがあったり、またしばらくして洪水があったりとか、大変な時代が続いたとされています。静岡では、洪水の後、ムラは移動しながらも、水田をもう一回補強するとか、いろんな工夫をして、とにかく水田を死守しながら生活を続けていた。静岡の人たちはとにかく水田を守っていくことで、この混乱の時代を何とかしのいだ。そういうことかなと思っています。

②愛鷹山の高位置集落

次は駿河湾の東側。富士山の裾野の駿河湾岸に愛鷹山という山があります。その麓の浮島沼と呼ばれる低地周辺の話です(スライド21)。この辺は弥生中期からのつながりがよくわからなくて、後期が始まって少ししてから、低地にやはり登呂のような集落がたくさん出てきます。ただ、後期の後半になると、足高尾上遺跡群と書いてありますが、愛鷹山の山裾、標高が80メートルから180メートルぐらいまで、東西約2キロ位の範囲にムラが固まって展開しているのがわかります。

(スライド22) この表は、この丘陵のムラと平地のムラとの関係を整理したものです。下のほうに低地のムラがまとまっていて、さきほどの足高尾上遺跡群の標高の高い所に固まった遺跡が上のほうに示してあります。後期の前半ごろに低いところにムラが現れて、一部は早い時期から上がり始めていますけれども、やっぱり後期の真ん中ぐらい、登呂遺跡の洪水の時期からあとぐらいに、標高の高い所にムラが形成されていったというのがわかります。

(スライド23) これは、足高尾上遺跡群の様子を示した図です。結構傾斜のきつい丘陵部で、谷が縦に

入って地形を分けているんですけれども、それぞれの尾根上にムラが広がっています。この集落の中には、集落の上のほうと下のほうに尾根を横切るように環壕と同じような断面V字形の溝が掘られていて、集落域を区画しています。だからある意味では環壕集落といえるんですね。一番北のほうにかなり大きな溝が、集落域を区画するように掘られているんですが、その溝の中には大きな、深さが2メートルぐらいの穴がボコボコいくつもあいているのが見つかっています。それは明らかに落とし穴なんですけど、そこ以上上のほうに行くと地形あがっていただけなので、そちら側から人が攻めてくるということはないように思います。多分この落とし穴に引っ掛かるのはイノシシとか、害獣のたぐいになるんでしょう。ですから、北側の溝は、必ずしもムラを敵対する集団から守るということではなくて、ムラの中には実は畑のあとなんかもたくさん見つかっていて、住居がさかんにつくりかえられているんですけれども。ここでの生活を害獣などから守って安定させるための溝ということも言えるかもしれません。この中には住居跡が何百軒も見つかっていますので、とにかく人が安定的に暮らしていたのは間違いない。洪水から逃れるために上に移ったとしても、なぜこんな高い所に行かないといけないのかとか、いろいろな謎は残っています。登呂の周辺とはまた違った集落の動きというのがここにはあったということです。

③菊川式土器の関東地方への移動と環濠集落 弥生後期の地域色

登呂の位置する静岡平野では扇状地の地形が弥生の水田をつくるのに良い条件だったといいました。一方、静岡、太平洋側の東海の東部から関東にかけては、扇状地だけではないいろいろな地形が広がっていて、そこにまたいろいろな弥生遺跡があります。土地の様子にも地域差があって、いろいろな集団関係があったことがわかってきています。

その様子はかなり複雑です。この図(スライド24)は東海の東部、静岡から関東の辺りのそうした状況を土器の様子からまとめたものです。『赤い土器の世界』という登呂博物館の展示図録で作ったものですが、登呂式土器の壺を赤く塗るといのはどうも信州方面の影響のようです。信州の弥生土器はずっと赤く塗っているのですが、その影響が直接登呂には来ている。けれども、その周りには、またちょっと違った土器があって、先ほどの愛鷹山の辺りには雌

鹿塚式土器。登呂の西側に行くと菊川式土器が分布する地域があります。菊川式土器の地域、菊川市や掛川市の辺りの低地部は大きな河川はなくて、土砂の流入が少ない。低地部はかなり平らなんですね。弥生時代には米をつくっているのは間違いないのですが大規模に水田を広げていくような環境ではなかったようです。最近レプリカ法といって、土器の粘土の中にどういう穀物が入っていたかを調べる方法があります。私たちもその調査をやっていますが、登呂遺跡の土器からはコメしか出ないんですけれども、この菊川式の地域でそれをやってみたところ、米以外にもアワ、キビなどの雑穀が出てきました。そんな結果もあります。

菊川式土器とその移動

(スライド25) 菊川式土器を使った人たちは、どうも登呂のように広い水田を開いて、それをずっと管理していくような生活というよりも、小規模な水田や畑作とか、そのほか山林をいろいろ活用していくような、そういう生活をしていたのではないかと。登呂は水田に固執しなければいけなかったのかもしれませんが、逆に菊川式土器を使った人たちは、いろんな所に結構流動的に位置を変えながらムラをつくっていく。登呂の人たちはずっと動かないんですけれども、この菊川式土器の人たちは、いろんな所に移動していたのがわかっています。30年以上前から、この菊川式土器と同じ形の土器が、関東地方で出土することが注目されてきました。そして、あとからわかってきたのですが、菊川式土器が移動した遺跡というのは、環濠集落である場合が多いのです。

30年ほど前ですが、東京の早稲田大学の校地内で発掘が行われて、環濠集落が出てきました。下戸塚遺跡といって右側の写真がそうです。平らに見えますが、さらに右側のほうが谷になっていて台地の縁につくられた環濠集落です。ここでも、静岡西部の菊川式土器とよく似た土器がたくさん出てきました。そんなムラが関東地方にいくつもあるというのがわかってきます(スライド26)。早稲田の下戸塚遺跡というのは13番、上の点線で囲ってある所ですね。ここでは菊川式土器がたくさん出てくるのですが、一緒にこの東京湾内のオレンジで囲ってある範囲に分布する久ヶ原式土器というのと一緒に出てきます。

ですから静岡から移動して行って、ムラをつくるわけですが、そこはもともと人がいないような場所だったようですね。そこに移動し

ていくのだけれども、住んでしばらく生活する間に、やっぱり近隣の人たちも一緒に暮らすようになる。ですから移動した当初は環濠集落で緊張状態があったのだと思うんですが、結局はやはりムラとして暮らしていく。それで、その近隣の人たちとも交流関係とか協力関係がある、そんなことではないかと思えます。

土器の図がたくさん並んでいますけれども（スライド27）、左寄りが菊川式土器、壺も特徴がありますが、ハケ調整の甕を使っている。右寄りが久ヶ原式土器、壺は赤く塗る土器で、ハケ調整じゃなくて輪積みの甕があつたりします。それらが一緒に出てきている。菊川式土器のほうが多いから、やはりもとは移動してきたということでしょうね。

時期的には、まだ登呂が洪水に埋もれる前から移動してきているというのがわかっていますが、登呂の洪水で埋もれたあとも、かなり人がまとまって移動しているというのもわかっています。こちらの土器は（スライド28）登呂の洪水の直後ぐらいかと思えます。何かその辺の時期で盛んに移動して行って、移動した先で環濠集落をつくる。そんな人の動き、地域社会の動きがあつたようです。

このようなことで、登呂の洪水のあとから今お話しした辺りが古津八幡山遺跡の時期と同じくらいの間の話だろうと思えます。登呂のムラで水田が開かれていたのが、洪水をきっかけに、人の動き集落の動きというのがはじまった。菊川式の移動というのも同じころに行われた。古津八幡山遺跡に高地性の環濠集落がつくられていたころです。

④高尾山古墳の出現と北陸北東部系土器

高尾山古墳

静岡の最後の話ですけれども（スライド29）、最初にお話ししたように静岡では高尾山古墳が古墳の出現に関して話題になっています。右側の駿河湾の地図で右側のほう2番の前方後方墳です。左側に古墳の編年表がありますが、もちろん高尾山古墳が一番上のほうですね。私が静岡大学に赴任したころだったのですが、当時いらっしゃった滝沢誠先生と神明山1号墳という古墳を調査しました。それが高尾山古墳の次の位置にある古墳。その次の神明塚古墳も静岡大学で調査をしてこの時期だということがわかりました。当時は静岡には古い古墳はなくて、本格的な古墳の出現は東日本では遅れると考えられていたましたが、静大で古墳を調査すると、みんな古くなるといわれました。調査したから古くなったわけ

ではないのですが、そういうことでいろいろ古い古墳が見つかるようになりました。

さて高尾山古墳です（スライド30）。平成17年、道路計画で壊されることになって発掘調査が行われた古墳ですが、写真の四角い部分だけ最初わかっていて、その上に神社が建っていました。解体して発掘を試みたら、長い前方部があるのがわかってきて、62メートルもある古墳だということになりました。周溝などからは土器がたくさん出てくるのですが、常識的に考えるとその規模の古墳が作られる時期よりもその土器がとて古いということで、注目を集めて話題になりました。

それでまた邪馬台国時代の話になっていきます（スライド31）。いろいろな研究者の評価にもとづいて、沼津市はこの古墳の年代をわかりやすいように実年代で西暦230年ぐらいとしました。卑弥呼が亡くなるちょっと前頃ということになります。左側はこの古墳の埋葬施設の写真ですけども、鏡などの副葬品があつて、上のほうに細長い鉄製品が見えますが、大きな槍が入っていました。邪馬台国時代の卑弥呼のころの、この地域のトップの人物だったろうということになるわけですが、卑弥呼を実際知っていたような、そういう人物じゃないか。スルガの国の最初の「槍の王」というのが、この古墳の主のキャッチフレーズということになっています。

北陸系土器

邪馬台国の時代、卑弥呼のころになると、静岡にもそういう人物が出てきて、この古墳、研究者によっては古墳と言わないような古い墳丘墓、に葬られた。新潟との関係で注目しておきたいのは、新潟ではこのころ、いろんな地域との交流が始まるという話でしたが、この古墳からもいろんな地域の土器が出てきています。右側に写真がありますが、1から3は伊勢湾岸の形の土器で1は高坏、2はS字甕と呼ばれる甕、3は器台で、この時期以降に広く分布します。4は甕なのですが、台が付いている。台が付くのは東海地域の特徴ですが、この4の甕の胴部の上のほうの特徴ですね。これが北陸北東部系の土器に似ている。「千種甕」と言っているような土器の特徴を示しています。台が付いているからそのものではないし、新潟でつくった土器がそのまま持ち込まれたものではない。逆に上部の特徴が、北陸北東部の特徴を持っているということは、おそらく静岡の人がつくったものでもないということですね。そういう特徴を、真似してできるものではないと思うので。

どうもやはり新潟から人が来て、何でこんなものをつくらなきゃいけなかったかというのは謎ですが、そういう人の交流があったんだということでしょう。

いろんな遺物が出ていて（スライド32）、その4の土器1個じゃなくて、新潟辺りの特徴をもつ甕形土器も何点かあるということですね。この真ん中辺りは東海西部系の土器。そういう様相は新潟の古墳初頭あたりの土器の様相とも似ている状況があったと。右側の上のほうの真ん中は「槍の王」の槍ですね。

静岡の古墳時代への転換

最後にこの頃、登呂の静岡はどうなったのか（スライド33）。高尾山古墳と同じころ、静岡の様相も変わってきています。登呂遺跡の南側500メートルぐらいの所にある汐入遺跡という遺跡ですが、登呂遺跡と違ってのは、ムラが直線的な溝で囲まれているんですね。その中の一画で、右下のほうの写真にある、登呂遺跡の祭殿と同じような建物が見つっていますが、これには池が付随していて、水場のおまつりがここで行われたと考えられています。登呂遺跡と違うのは、その周りを溝で囲んで、さらに堀があるようです。ほかの区画でも大型の建物などが溝や堀などで囲まれている。それはやはりそれぞれの区画が何か機能を持っていてそれが集会的にあるので、登呂の一般的な人たちが集まったムラとだいぶ違う、何か政治的な構造を持ったムラということになると思います。古墳時代になって首長の居宅・居館というのが出てくると言われていますが、早くもそういったものがここにあったと言えるんだろうと。祭祀の空間、人々を惹きつけるような、登呂ではそういう空間だったものが首長に占有されるような、そんな集落社会だったことが言えるんじゃないでしょうか。

（スライド34）高尾山古墳からそれほど時期は経っていない、3世紀の後半ぐらいの時期だと思うんですが、静大で調査した神明山1号墳という古墳ですね。これも土器がかなり古いというので話題になったのですが、それよりも。全長が70メートルぐらいの前方後円墳だということがわかったんですが、その形をよくよく検討して行って、やっぱり例の箸墓古墳とあわせてみるかという話になりました。するとぴったり合ってしまった。箸墓古墳は全長280メートルぐらいですね。ちょうどその4分1にしたときに、ほとんど規格がぴったりと合うということがわ

かりました。時期もおそらく3世紀の後半ぐらいに収まるんじゃないか。そんなものが静岡にもこの時期につくられていたんだということがわかっています。登呂遺跡の洪水以降、何か混乱した時期があったけれども、古墳時代、そういう段階が早くも来た。静岡ではそういうことがわかってきたということですね。

3. 東海からみた邪馬台国時代の新潟

（スライド35）静岡の話、少し駆け足になりましたが。静大にも、新潟とか北陸から来る学生さんがいますが、意外と静岡の地理が落ち着くというんですね。能登半島と比べてですが、静岡の伊豆半島が突き出て湾になった地形というのはすごくなじみがあると行った人もいます。冬場は、静岡から焼津のほうに蜃気楼が見えたり。そういった地形的な共通性もないわけではない。東日本と西日本の、北日本も含めてですが、「接点」という似た特徴もある。邪馬台国の時代にも、古津八幡山遺跡で高地性集落、環濠集落が形成される。関係は薄いように最初は思っていました。特に登呂が洪水で埋もれて以降の時期、やはり共通するような点がいろいろあるなど、今回思いました。

①高地性・環濠集落—倭国乱の頃

静岡では、登呂遺跡も洪水の後、静大の近くの高台に移った。愛鷹山の周辺では、非常に高い位置に集落が形成される。その前後の時期、菊川式土器を使った人たちは、関東地方へ移動して環濠集落をつくった。新潟でわかっている「倭国乱」の混乱の時期、太平洋側でもいろんな動きがあった。環濠集落をつくるというのは、緊張状態を示しているのだと思いますが、人が集団で移動するということとも関係していて、その初期に環濠集落をつくる。その移動先で、周辺の集団との関係があることもわかります。これは天王山式と新潟の関係というのとも、似ているのではないかと思います。

静岡平野も混乱の時代であったと思いますが、水田を必死に守りながら生き抜いた。また違った開発の戦略を持っていた菊川式の人たちは、別の新天地を求めて移動した。逆に登呂の人たちはそれができなかったのかもしれない。「倭国乱」はそういう政治的な、物語に出てくる話。それも当然一面なんでしょうけど、背景として各地にいろいろなことがあったと考えられるかなと思います。

②新潟から来た人々

高尾山古墳で新潟の土器とよく似た土器が出土した、恐らく新潟から来た人がいたんだという話をしましたが、最初にお話ししたルートを通して来たのかもしれませんが(スライド36)。新潟の話ということで、個人的に気になっていたことを最後にお話しさせていただきます。最初の地図の千葉県の所に国府関遺跡という遺跡の点を落としてあります。学生のころ、この遺跡の発掘に参加していたのですが、そこから古墳初頭ぐらいの土器がたくさん出てきました。その中に、底部が尖った甕形土器がかなりの量あって、結局これが北陸北東部系の土器だったということになるのですが。出土した土器全体の中で、3分の1近くこういう土器がありました(スライド37)。

房総半島のこの遺跡のちょうど西側に国分寺台遺跡群という、やはり全国との交流を示すような有名な遺跡があって、北陸系土器も出ていますが、その北陸系土器とも少し違う。この国府関遺跡から出ている北陸系の土器は、新潟の土器に近いんじゃないかと思います。高尾山古墳の新潟系の土器は、台を付けなきゃいけないんですけど、国府関遺跡では、一緒に東海系の台が付いた甕形土器もたくさん出てくるのですが、その台はわざわざ打ち割って取り除かれている。だからここでは新潟の流儀に合わせてあるのではないかと。

国府関遺跡は、木製品を専門的につくった遺跡ですが、少し唐突かもしれませんが、新潟の人がわざわざここに来たのは、その木製品の製作に何か技術的に貢献したのではないかと。そういった技術的に進んだ人たちが生活していたので、東海の土器の使い方がおかしいと言って、台を取り除いたということがあるかもしれません。古墳時代の始まり頃に広域に土器が動くということは、それに商品価値があるからという議論もあります。しかしつくられた土器を見ると人が動いているのも確かです。古墳がつくられるということもそうかもしれませんが、いろんな技術が政治的に、交渉・交流をもつ。そういったことを背景として動いている土器というものではないかなと、そういうふうに思っています。ですから高尾山古墳に来た新潟の人も、何か特別な意志と技術を持っていたのかもしれないと思います。

まとめ

(スライド38)「邪馬台国」の時代、新潟の特徴的な高地性集落・環濠集落が発達する時期と東海・静岡とを比較してみました。環境変動など背景はいろいろあったと思われませんが、そのような状況を生き抜こうと抗ったというのは新潟の集落も静岡の集落も同じなのかなと思います。文献には「倭国乱」・戦乱の時代と記されるわけですが、一方で交流と開発が進展した時代とも言えるのではないのでしょうか。

次に訪れる「卑弥呼」の時代、高尾山古墳の時代。広範囲に交流が起こる時代ですけれども、その前にも移動を伴って地域社会の隙間を埋めていくような動きがあって、その上で政治的な関係性が出来上がっていった。そういう政治的な関係と結びつく先進的・基盤的な技術の交流ということもあって、人も盛んに動いているんじゃないかと思います。新潟では「玉づくり」があって、そういう技術の交流というのも、広域の交流の背景に考えられるかと思います。

長時間になりましたが、これで今日の話が終わります。ご清聴ありがとうございました。

新潟県埋蔵文化財センター・史跡古津八幡山遺跡由弥生の広域展示
令和3年度企画展「倭国大乱から律令国家成立までの越後平野」
講演会 令和3年10月17日



古津八幡山遺跡（新潟市）

東海からみた邪馬台国時代の新潟 ～登呂の洪水以後の東日本～



登呂遺跡（静岡市）

静岡大学人文社会科学部
篠原 和夫

スライド1

プロローグ
君は太平洋を見たか
僕は日本海を見た
(中津城新道のキャッチフレーズ)



●新潟
●古津八幡山遺跡
●登呂遺跡
●山形県
●山形市
●山形県
●山形市

スライド2

今日の話の内容

- 邪馬台国時代の新潟と東海（静岡）
 - 弥生時代後期から古墳時代初期（1世紀から3世紀）の邪馬台国の時代新潟と東海（静岡）で何が起こっていたのか。
- 邪馬台国時代の東海～静岡を中心に～
 - 静岡とその周辺の邪馬台国時代の遺跡の動向をたどり、その特徴をつかむ。
 - ①登呂遺跡の盛衰と後期中頃の洪水
 - ②愛鷹山の高位置集落
 - ③菊川式土器の関東地方への移動と環濠集落
 - ④高尾山古墳の出現と北陸北部系土器
- 東海からみた邪馬台国時代の新潟
 - 新潟と東海の邪馬台国時代の同じころ、環濠集落と累系土器の共存、高位置集落、古墳時代初期の広域移動など同時期に類似、関係するよう動きが認められる。
 - ①高地性・環濠集落→後期乱の頃
 - ②新潟から来た人々

まとめ

スライド3

1. 邪馬台国時代の新潟と東海（静岡）

時期区分	新潟	新潟	静岡	東海
弥生時代	前期	編織	八幡山遺跡	奥谷遺跡
	後期	法山	八幡山遺跡 北北系・折系土器 東系土器	登呂遺跡 菊川式・山中式 の移動(1)
	後半	月影	奥谷遺跡 (高地性・環濠集落) 邪馬台国の時代	登呂遺跡 菊川式の移動(2) 足高・尾上遺跡群 (高位置集落)
古墳時代	前期	白江	他地域土器の流入 東北系土器激減	沙入原古墳 高尾山古墳
	後期	古府 丸七		大塚I 大塚II 小高

◎新潟で古津八幡山遺跡などの邪馬台国時代の繁栄関係を示す高地性・環濠集落が営まれているところ、列島太平洋側の東海ではどのような状況があったのか、大規模な水田を営んだ登呂遺跡が洪水による終焉を迎え高位置への集落や遠隔地へ環濠集落を形成した移動が行われるなどやはり運動の様相が認められる。

スライド4

倭国大乱の頃の新潟

古津八幡山遺跡、裏山遺跡、妻太遺跡などの高地性の環濠集落が形成されるようになる（緊張状態）。

北陸北東部系、東北系土器が共存し、折系土器。

後期の終わりごろまでに環濠埋没



◇令和3年度秋学期開催「倭国大乱から律令国家成立までの越後平野」展の収録
◇甘粕健爾「越後八幡山遺跡と倭国大乱」

スライド5

邪馬台国・卑弥呼の頃の新潟

北陸北東部系の土器が主体に、畿内・北陸西部系土器が遠隔地から移入。列島の遠隔地土器の広域移動の時代



◎令和3年度秋学期開催「倭国大乱から律令国家成立までの越後平野」展の収録

スライド6

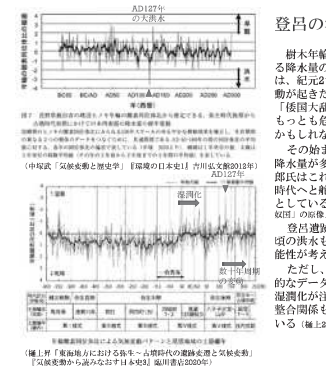
登呂の洪水はAD127年か？

樹木年輪の酸素同位体比から推定される降水量の変動のデータから、中塚武氏は、紀元2世紀には数十年周期の気候変動が起きた時期であることを指摘し、「倭国大乱のような動乱を生じさせるもっとも危険な気候変動だったといえるかもしれない」とした（中塚武2019年）。

その始り頃のAD127年には極端に降水量が多かったのが推定され、赤塚次郎氏はこれを境に東海地域社会は古墳時代へと舵を切り、廻り集落が誕生したとしている（赤塚次郎「環濠集落と東海地域」『弥生』の巻頭『弥生集』2019年）。

登呂遺跡の集落を埋没させた後期中頃の洪水もAD127年のことであった可能性が考えられる。

ただし、最近弥生時代のさらに長期的なデータが公開され、中期末頃からの温暖化が目立つ一方、土器編年との整合関係もやや異なった意見が出されている（藤上2020年）。



藤上 研「東海地方における弥生～古墳時代の遺跡集積と気候変動」『気候変動から読みとく弥生』(編者 藤上 研) 2020年

スライド7

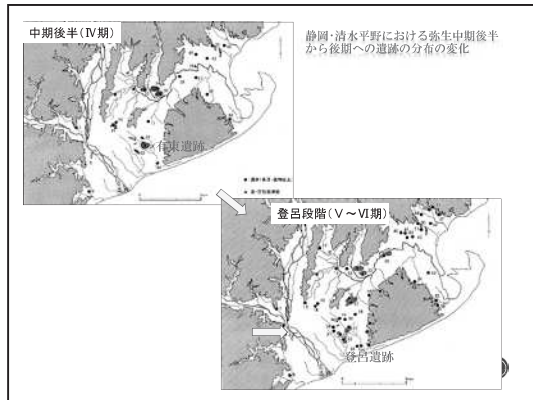
2. 邪馬台国時代の東海～静岡を中心に～

①登呂遺跡の盛衰と後期中頃の洪水

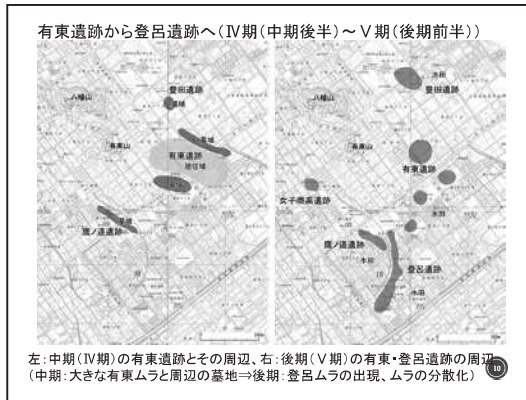


西方上空から見た静岡清水平野

スライド8



スライド9

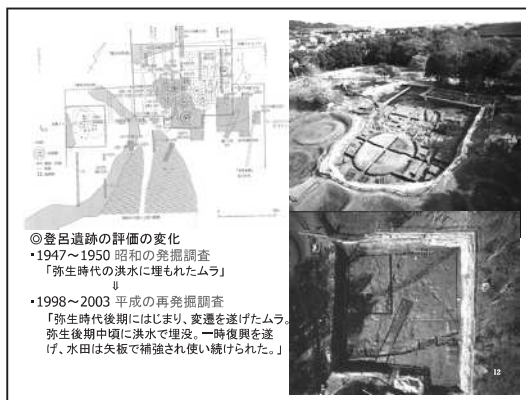


左: 中期(IV期)の有東遺跡とその周辺、右: 後期(V期)の有東・登呂遺跡の周辺
(中期: 大きな有東ムラと周辺の墓地⇒後期: 登呂ムラの出現、ムラの分散化)

スライド10



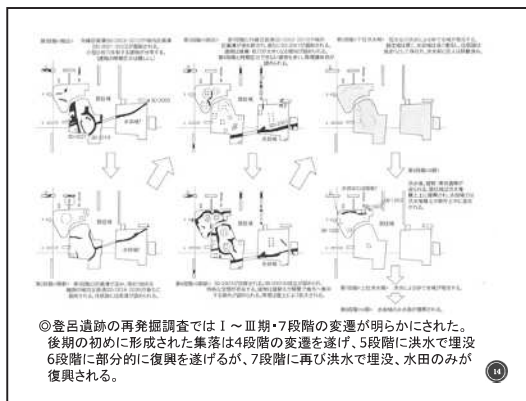
スライド11



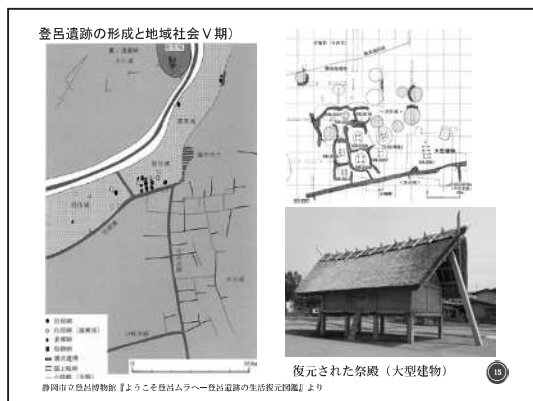
スライド12



スライド13



スライド14



スライド15



スライド16

登呂遺跡の形成と地域社会(V期)
鉄の普及がもたらした変化


- 大量の木製品・木器が出土
- 木器加工用の磨製石斧はごくわずしか出土しておらず、それを製作した痕跡もない
- 木材の伐採や加工には、その加工痕跡からも鉄斧が使われるようになったのだと考えられる

⇒鉄器の普及

- 磨製石斧を作り続ける作業(有東)から解放された。
- 木の伐採加工や木器の製作の効率は飛躍的に向上。村の中で集約的作業は大幅に減り、労働力を開発や生産向けることが可能になった。

⇒有東の大きな村が解体縮小し、登呂のような広い水田を拓いた村が一気に作られた。

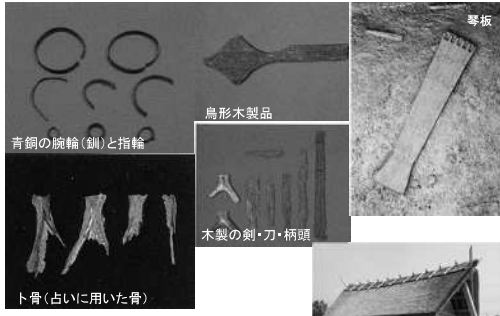
⇒鉄資源は静岡の立地や登呂式土器の系譜関係からも日本海側から中部高地を経てもたらされた可能性が高い



鉄器で加工された登呂の木製品

川合遺跡の鉄斧

スライド17




青銅の腕輪(釧)と指輪

鳥形木製品

木製の剣・刀・柄頭

ト骨(骨いに用いた骨)

登呂遺跡の祭具と考えられる道具類



スライド18

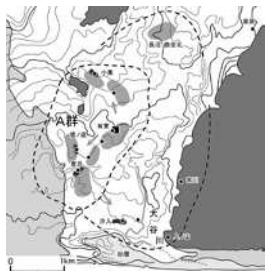
登呂遺跡の形成と地域社会(V期)

登呂と静岡平野南部の農業共同体

登呂遺跡の祭殿を中心とした集団的な祭祀が復元できる。

登呂に祭祀ができるのは、遺跡の変遷の後半段階。祭祀に集った人々はより広範囲の集団と推定できる。

有東遺跡から分かれた集落集団の農業共同体有結合を推定。



静岡平野南部の弥生遺跡群の展開



登呂の復元水田(現在)

◎登呂は後期中頃の洪水で埋没し、居住域は消滅する。すべての遺跡が低地から姿を消すわけではないが、代わるように有度山麓に宮川、上ノ山などの集落が現れる。

スライド19

登呂の時代の地域社会—遺跡の移り変わりどまりと広がりを調べる

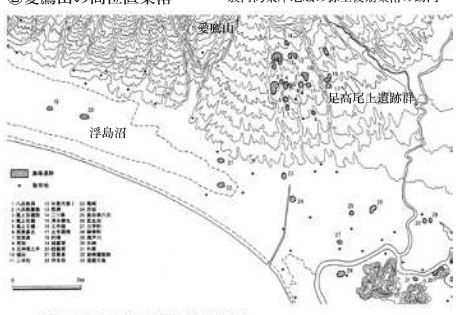


鉄器の普及、弥生後期にかけての環境の悪化が農耕への依存を強める方向に向かわせた?後期には静岡平野の各地で広大な水田を切り開く動きが認められる。(後藤2008「静岡清水平野における弥生遺跡の分布と展開」『静岡県考古学研究会140号』)

スライド20

②愛鷹山の高位置集落

駿河湾東岸地域の弥生後期集落の動向



愛鷹山南麓周辺の弥生時代後期遺跡分布図
(小泉新紀2002「愛鷹山南麓周辺における弥生集落の動向」『弥生集落論』第231号『弥生学』17号)

スライド21


遺跡名	位置	年代	特徴	集落規模	備考
1	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
2	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
3	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群
4	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
5	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
6	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群
7	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
8	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
9	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群
10	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
11	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
12	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群
13	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
14	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
15	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群
16	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
17	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
18	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群
19	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
20	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
21	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群
22	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
23	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
24	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群
25	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
26	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
27	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群
28	足高尾上	弥生後期	高位置	大規模	足高尾上遺跡群
29	足高尾上	弥生後期	高位置	中規模	足高尾上遺跡群
30	足高尾上	弥生後期	高位置	小規模	足高尾上遺跡群

愛鷹山南麓周辺の集落遺跡消長表

◎後期前半に低地周辺(浮島沼周辺など)に位置した集落は後期後半に高位置に形成されるようになる。足高尾上遺跡群は周辺に同様の緩斜面が広がるにも関わらず、標高80mから180m付近、東西2kmのごく限られた範囲に集落が密集する。

スライド22

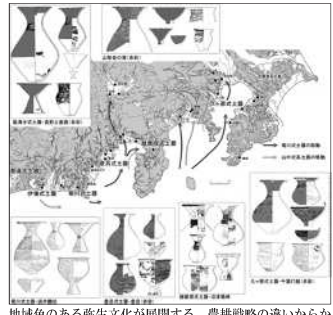
愛鷹山山麓の大集落
(後期後半:足高尾上遺跡群)



スライド23

③菊川式土器の関東地方への移動と環濠集落

弥生後期の地域色と土器の移動(人の移動)



東京湾岸・房総半島にクッ原式が、駿河湾東岸に雄鹿式、静岡清水平野に有東式に後続する登呂式土器が、天竜川以東のおそらく志太平野も含む東遠江地域に白岩式に後続する菊川式土器がそれぞれ特徴的な異なる後期前半の土器型式として形成された登呂式土器の楕圓文や赤彩の流行は中部高地の影響とみてよいだろう。

⇒この時期に地域色がはっきりしてくることは、自集団と他集団を明確に意識し始めたようにも見える。

地域色のある弥生文化が展開する。農耕戦略の違いからか、新天地をもとめて移動する集団もあった(菊川式土器、伊場式土器(山中系土器)の移動)。

(後藤和夫2012「登呂の時代の駿河と赤彩土器」『赤彩土器の東遷』)

スライド24

◎南関東東地方への菊川式土器の移動

下戸塚遺跡の陶器集落

中継太平洋沿岸地域の弥生後期の土器の移動(藤枝市史通史編上(藤枝市2019)より転載)

埼玉県和光市午王堂山遺跡・花ノ木遺跡、東京都下戸塚遺跡など東京湾北西岸域で、菊川式土器がまとまって出土することが知られる。これらの集落の多くは環濠集落で、周辺地域の在来的な土器(久ヶ原式)を含んで、変容が進んだ菊川式土器が共存する。人が集団で移動して定住したことを示す。

スライド25

菊川式系の移動

久ヶ原式の分布圏

山中式系の移動

スライド26

菊川式土器の技術的特徴を備えた壺・甕ほかの器種、久ヶ原式の特徴を備えた各器種が共存し、折衷的な土器もみられる。

花ノ木遺跡(上)・下戸塚遺跡(下)出土土器

スライド27

後期後半の当初頃(登呂の洪水直後頃からか)、再び菊川式土器の新しい時期の特徴を備えた土器群が武蔵野台地東部周辺に移動する。

東京都西台後藤田遺跡

スライド28

④高尾山古墳の出現と北陸北東部系土器

スライド29

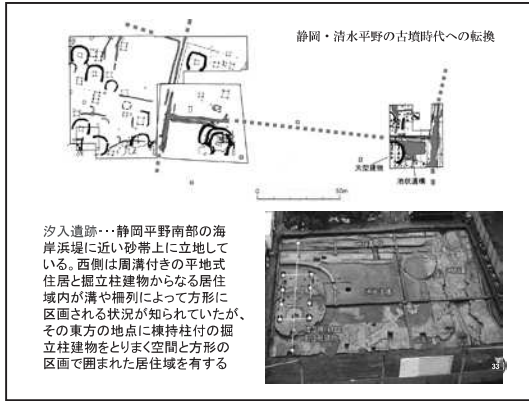
高尾山古墳(沼津市)：平成17年からの計画道路建設のための調査で、はじめて3世紀前半代とみられる全長62mの前方後方墳であることが明らかになった。保存運動と協議の結果、道路計画を一部変更して保存されることとなった。

スライド30

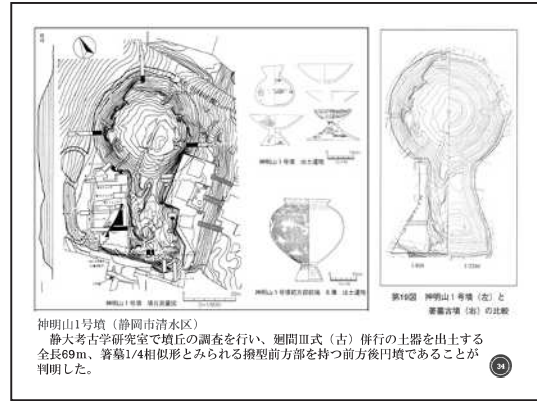
高尾山古墳の外來系土器：4は聯台がついているが、胴部から上位は北陸北東部の特徴を持ったものと考えられている。

スライド31

スライド32



スライド33



スライド34

3. 東海からみた邪馬台国時代の新潟

新潟と東海の邪馬台国時代の同じころ、環濠集落と異系統土器の共存、高位置集落、古墳時代初期の広域移動など同時期に類似、関係するような動きが認められる。

①高地性・環濠集落—倭国乱の頃

【新潟】

- 古津八幡山遺跡、裏山遺跡変太遺跡などの高地性の環濠集落が形成されるようになる（緊張状態）。
- 北陸北東部系、東北系土器が共存、折衷土器。

【東海・関東】

- 後期前半の集落が中頃に洪水で埋没する例（登呂）
- 後期後半にかけて高位置などへ移動。
- 後期前半から遠隔地へ移動（菊川式の南関東への移動など）。
- 空白を埋めるように環濠集落を形成して移住。移住先で周辺土器と共存

※緊張関係を保ちながらも移住（地域開発）、隣接集団と共存
⇒新しい地域社会を形成する動きでもある。

スライド35

②新潟から来た人々
列島的な遠隔地土器の広域移動の時代。静岡で北陸北東部系土器が出土すること。折衷品が作られたこと。
⇒新潟から静岡へやってきた人々

スライド36

千葉県茂原市国府岡遺跡で出土した北陸北東部系土器と製作途上品を含む木製品類
：北陸系は北東部系中心で壺のほか多器種にわたる。ほかに在地系と東海系。東海系
台付甕の脚台を意図的に折損。
木製品（アカガシ亜属製農具類）の生産を専門的に行った遺跡。北陸系土器を
用いた人々は技術者集団として移住し、木器生産に携わったのではない。
※土器の広域遠隔移動の背景には、鉄・装飾品などの流通とともに技術者の移動
伴っているのではないか。：学生時代に国府岡遺跡の調査・整理に参加して以来...

スライド37

まとめ

◇特徴的な高地性・環濠集落が発達する邪馬台国時代の新潟を念頭に、東海・関東の同時期の集落や社会の動向を概観しながら比較を試みた。東海でも環境変動などに対応して、集落の移動や地域間の集団的移住が行われ、移動先で環濠集落が形成される状況が知られる。一方で、移動先でも隣接集団との共存は確認され、新潟の高地性環濠集落の様相とも共通するようである。

◇次に訪れる、卑弥呼の時代、列島的な遠隔地土器の広域移動の時代。中短尺は気候の長期変動が収まったと指摘する。古墳（墳丘墓）の広域築造に政治的関係構築が見いだされる。土器の遠隔地交流の背景にはやはり人の移動もあって、むしろ政治的な背景を持つたろうが先達・基礎技術の交流も盛んにおこなわれたと推察される（そうした物流研究を参照すべきである）。

【参考文献】（スライド中に挙げたもののほか）
静岡考古学会2014『駿河における前期古墳の再検討』
静岡考古学会2015『駿河における古墳時代前期集落の再検討』
藤原和夫2019『農耕文化の形成と移住遺跡』『大宮の静岡ガイド』昭和堂
新津市教育委員会2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』
日本考古学協会新潟大会実行委員会1993『東日本における古墳出現家庭の再検討』

※新潟市文化財センター 相田泰彦様 立木宏明様 には過去の講演会資料等を送っていただき参考にさせていただいたほか、大変お世話になり、心から感謝申し上げます。

スライド38

写真・図出典一覧

- スライド1左上：新潟市文化財センター2018『平成29年度史跡古津八幡山弥生の丘展示館企画展関連講座・講演会記録集』
スライド1右下・15右下・16：筆者撮影
スライド2：Google Earth画像に加筆
スライド4：新潟市教育委員会2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』等を参考に筆者作成
スライド5・6：令和3年度秋季企画展「倭国大乱～律令国家成立までの越後平野」展示図録、甘粕健編2001『越後裏山遺跡と倭国大乱』新潟日報事業社
スライド7上：中塚武2012『気候変動と歴史学』『環境の日本史1』吉川弘文館
スライド7下：樋上昇2020『東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動』『気候変動から読みなおす日本史3』臨川書店
スライド8・18：静岡市立登呂博物館提供
スライド9・19：篠原和大2008『静岡・清水平野における弥生遺跡の分布と展開』『静岡県考古学研究』40 静岡県考古学会
スライド10・11・20・23：篠原和大2012『登呂の時代の駿河と赤彩土器』『特別展赤い土器の世界～登呂式土器の赤彩を探る～』静岡市立登呂博物館
スライド12・13・14：静岡市教育委員会2005『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書』
スライド15左・17上：静岡市教育委員会2011『ようこそ登呂ムラへー登呂遺跡の生活復元図鑑ー』
スライド15右上：岡村渉2008『静岡平野登呂遺跡』『弥生時代の考古学』8 同成社
スライド17下：静岡県埋蔵文化財センターHP
スライド21・22：小泉裕紀2002『愛鷹山南麓周辺における弥生集落の動態』『弥生集落論』第5回中部弥生時代研究会
スライド23左：沼津市教育委員会2004『八兵衛洞遺跡発掘調査報告書』
スライド23右上：静岡県埋蔵文化財調査研究所1997『北神馬土手遺跡 他I』
スライド24左・25・33上：藤枝市2010『藤枝市史通史編上』
スライド24右：国立歴史民俗博物館編1991『邪馬台国時代の東日本』六興出版
スライド26：篠原和大1998『弥生土器の生産と規格性』『静岡大学人文学部人文論集』48-2 静岡大学人文学部に加筆
スライド27：篠原和大2009『南関東・東海東部地域の弥生後期土器の地域性』『南関東の弥生土器2』六一書房
スライド28：都内第二遺跡調査会1999『西台後藤田遺跡』
スライド29・30・31・32・34：静岡県考古学会2013『駿河における前期古墳の再検討』
スライド31右・36上：沼津市教育委員会2012『高尾山古墳発掘調査報告書』
スライド33下：静岡市教育委員会提供
スライド36下：滝沢規朗2013『高尾山古墳周溝及び周辺出土の北陸北東部系土器について』『西相模考古』第22号 西相模考古学研究会
スライド37：長生郡市文化財センター1993『千葉県茂原市国府関遺跡群』より構成